



表紙について

鳥瞰絵師、吉田初三郎の描いた今回の年次大会開催地、その付近が遠近感のバランスたのしく描かれている。舌を巻くばかりだ。東映京都撮影所はどこか？ 探してみるのも一興である。

2014年10月12日発行

ものがたり観光
第4号

ものがたり観光

Narrative
Tourism

ものがたり観光行動学会誌 第4号



9万年の大地における 新たな観光と若者の旅

[登壇者] 藻谷浩介(株式会社日本総合研究所調査部 主任研究員) / 田口五朗(NHK 福岡放送局 局長)
桑野和泉(湯布院温泉観光協会 会長) / 橋本祐輔(大会実行委員長・豊後大野市 市長)
[コーディネータ] 加藤晃規(学会副会長: 関西学院大学総合政策学部教授)

New Tourism for an Area Characterized by a Geological Feature
of Ninety-thousands Years, and a movement of the Young
Symposium on Religion and Tourism



0. はじめに

加藤(コーディネータ) 関西学院大学の加藤と申します。

「9万年の大地における新たな観光と若者の旅」と題しましてセッションを始めたいと思います。藻谷先生の基調講演「若者はなぜ旅をしなくなったのか」を受けまして、パネラーの皆様のお話がどのように展開されるのか楽しみです。

藻谷先生には、現在の少子高齢化を側面から捉えた地獄絵を非常に面白く的確に描いていただきました。この地獄絵に対して、いやいや地域の側はそんなことはないですよといったご意見が出るのではないかと思います。ニューツーリズムという言葉が市民権を得てきていますが、このことも踏まえていただき、パネラーの皆さんそれぞれが関わっておられる分野やお仕事の紹介と併せて、最近の観光現象をどのように見ておられるかお話しいただきたいと思います。まずはレディファーストということで、桑野さんお願いします。

1. 若者を迎えるための湯布院の多様な入口づくり

桑野 皆さんこんにちは。山向うの湯布院温泉から参りました桑野和泉です。

ものがたり観光行動学会の第3回年次大会を大分で開いていただき、本当にありがとうございます。大分県民といたしましても非常にうれしく思います。また、豊後大野市での大会ということで大変楽しみにして参りました。

まずは湯布院のことをお話しさせていただきます。湯布院は年間400万人近くの方たちにお越しにいただいておりますが、実は私たちが若い力を感じるようになりましたのは、ここ数年のことです。私たちは地元主催のいろんなイベントをやっていますが、先日も畜産振興とふる里を守ることをテーマにした「牛喰い絶叫大会」を開催しました。この大会は40年近く続いておりますが、これまではイベントのすべてを地元の力でやっておりました。しかし、高齢化が進んでいますので、イベントの担い手は私よりも年上の方たちがほとんどでした。ところがここ5、6年は、学生さんたちがボランティアで関わってくれるようになり、その数は年々増えて、現在は150名のボランティアのうち40名近くが学生ボランティアという状況です。20歳代前後が中心ですが小学生もいます。この人たちは大分県内や九州全域から来てくれています。一度ボランティアとしてイベントに関わると、プライベートでも湯布院に来てくれるようになります。

私は、若い人たちが旅をするしだけでなく、地域と関わりを持つ何らかのきっかけがあれば出かけてきてくれると思います。彼らにやってもらっているのは、私たちと一緒にお客さんたちを迎えるボランティアで、私たちは彼らに何も用意していません。しかし、確実に湯布院のファンやリピーターになってくれています。このように、こちらが関わりの入口を多様に設けることで状況は変わってくると実感しています。また、若い人をはじめ外の人たちが入ってくると、地元のおじちゃんおばちゃんたちも喜びますし、私たちも若い人たちからエネルギーをもらって、イベントにもこれまで以上の力が入ります。

今回のテーマに関しましては、私たち迎える側が多様な入口をつくるのが大切であり、そのことが将来的な湯布院のあり方につながっていくのだと思います。

